

## あとがき

2002年に日本腎臓学会渉外・企画委員会内に組織された腎生検検討委員会が2004年に上梓した「腎生検ガイドブック」の会誌公開を今回で終えることになりました。腎疾患診断において最終診断を担うことの多い腎生検をより安全に行うためのおおまかな指針が示すことを目的と致しましたが、不十分な点が多々あることは否めません。しかしながら、腎生検診断に関する優れた出版物は多いなかで、腎生検の術前評価、説明と同意、手技の実際、術後経過観察と合併症防止、腎生検検体処理、さらには移植腎生検についての情報を提供した出版物は初めての企画だと思われま

す。発表後に寄せられた意見のなかには、開放腎生検が標準的な手技と言えるのか、採取標本数については倫理的な指針が必要ではないかなどの指摘がありました。これらは今後に残された問題と考えられます。腎生検に関する合併症についても継続的な追跡が必要だと思われま

す。現在、渉外・企画委員会のなかでは腎病理標準化委員会が積極的に活動しております。腎生検を安全に行い、得られた貴重な組織を適切に処理して、より正確に診断し、患者さんの治療に最大限に役立てる作業が標準化される日も近いと期待しています。

「腎生検ガイドブック」は、一旦、冊子として公表した後に会誌上で公開することになりました。今回の経緯は、日本腎臓学会としてガイドラインなどを編集・公開してゆくうえでのルールが必要であることを示しました。今後も、日本腎臓学会（もしくは日本腎臓学会に属する委員会）の名前で「腎臓病の診断・診療指針」の類を発行する機会が増えることが予想され、いずれの場合においても日本腎臓学会会員の意見が反映されたものである必要があります。もちろん、「診断・診療指針」には、エビデンスに基づいて「診断・診療」を行ううえで医師が強く意識することが要求されるものと、「診断・診療」に関して、多くの腎臓病の専門医が一致している見解を一般市民やコメディカルに広報するものまで幅広いものと想定されます。その策定に当たって日本腎臓学会会員の意見を反映させる過程は必ずしも同じである必要はないと考えられますが、今後、渉外・企画委員会では、これらの指針を策定してゆく過程で、どのように日本腎臓学会会員の意見を反映させるかについての一定の見解をまとめようとしております。この件に関してもご意見を頂き、学会活動に役立てて行きたいと思

渉外・企画委員会 腎生検検討委員会

平方秀樹